

# 友誼の聲

THE VOICE OF FRIENDSHIP

2011年6月  
第84号  
日本語版

イエズス会中国センター  
Tokyo Jesuit China Center  
東京都台東区下谷 1-5-9 「上野教会方」  
Tel : 03-3842-4407 Fax : 03-3842-4408  
E-mail : jccstaff@yo.rim.or.jp  
http://www.sjchina-japan.org

## 聖神降臨の祝日、おめでとうございます

今年のご復活祭は4月24日で、いつもの年より少し遅い感じでした。桜の花が丁度散り終わる頃だったと記憶しています。以後5月一杯をかけて主の復活を記念し、私たち自身も主の復活に与えられるよう祈りました。6月に入ってすぐ主の昇天を記念し、今日私たちは神の第三位・聖霊の来臨を祝っています。この祝日はイエス・キリストの昇天を受けて、聖霊の到来を祝い、新しい時代の到来を発表するものです。その意味で、使徒たちの団体が聖霊に指導され、新しい教会時代が始まったことを宣言する日、つまり教会の誕生日なのです。この祝日を皆様と共に今日お祝いできることを感謝したいと思います。

この祝日に当たって、中国センターの信徒の方々、また日頃このセンターに関心を持ち、支え・援助して下さっている方々に、心から感謝申し上げたいと思います。聖霊の導きと皆様のご支援のおかげで、この中国センターも日に日に盛んになり、東京、否日本における中国の教会の一部・支部を思わせる霊的な場となってきました。

さて、最近の中国センターは若い人たちの姿がすごく目立ちます。仕事のため、或いは勉強のために来ている留学生の方々の姿です。もちろん、長い間日本にいらっしゃる方々もあります。その方々は若くて元気なお子様方と一緒にいらしゃいますので、現在の中国センターの若さに益々花を咲かせてくださっています。私は時々東京・横浜などの教会にも出入りいたしますが、それらの教会では、一般社会と同じように、高齢化が進み、若さが非常に貴重になっています。ところが、この中国センターは、そのような一般の教会ではとても見られない若さの饗宴です。年取ってきた私自身、大きな力をいただく有り難い雰囲気（様相）です。感謝！！

3月11日東北地方に大きな地震、そして津波が発生し、大きな被害をもたらしました。と同時に、福島原子力発電所が津波の影響で破壊・事故を起こし、放射能被害の恐れが出てまいりましたが、その際、沢山の人が自国に帰国なさいました。中国センターの方々も例外ではありませんでした。特にお子様のある家の方々が多かったように思います。それも仕方ないこと。お子様のある家では当然と言えることでしょう。それも5月末頃になりますと、再び東京にお帰りになる方々が目につき、中国センターでは、又かつての賑わいが戻って来ているように感じました。この若さの中で、毎日曜日元氣あふれる雰囲気の中で、ミサを共にできることは、本当に有り難いことだと実感している次第です。

この若さあふれる中国センター、日本で唯一の中国人

教会を担当する者として、今後のセンターの在り方について、時々考えます。勿論カトリック教会であり、信仰・秘跡の場であることには変わりありませんが、中国の教会との関係をどのようにしていったらよいか。この信徒の方々の故郷の教会とすぐ関わりを持てるなら問題はありませんが、現在の中国の政治情勢ではそれは難しいです。聞くところによると、この数年中国政府は中国国内の教会（地下教会系）・信徒にたいしてかなり寛大になって来ているようですが、でもまだまだでしょう。そこで考えるのが、中国大陸以外の中国人の教会と連絡を密にすること、これが大きな助けになるのではないかと。たとえば、台湾の教会、香港の教会、マカオの教会、更にはマレーシア、シンガポールの教会などとの連絡です。お互いに連絡しあい、情報をもらうと同時に、司祭等の行き来を密にし、お互いに助け合う。このようなことができるようになったら、素晴らしいと思います。このところ毎年夏に台湾から神父様が来てくださいますが、これ



が香港、マカオ、なども広がれば素晴らしいのでは？

もちろん、中国国内の教会（今のところでは、福建省内の教会）とも連絡・関係が出来、情報などの往来が可能になるなら、それ以上素晴らしいことはありませんが...。いつの日かそのような日が到来することを願っています。

最後になりましたが、中国国内の教会のため、不自由な信仰を強いられている信徒の方々のために、いのりしましょう。カトリック教会（地下教会）に対してかなり寛大になってきたとは言え、まだまだ共産政権の目（公安の目）を気にしなければならない状況のようです。何の心配もなく信仰を保ち、生きて行ける日が、一日も早く来るよう、祈りたいと思います。

井上潔神父

### お知らせ

#### 6月12日(日) 聖霊降臨祭

10:30 ~ 11:55 赦しの秘跡  
12:00 ~ 合同ミサ  
ミサ後 パーティー

#### 8月13日(土) ~ 15日(月) 静修と祈りの会

講話：毎日の午前と午後（昼食があり）

初日 8/13 (土) 11時から始まる

1日や2日だけの参加も可能

中国語で行う（通訳なし）

時間割は会場に掲示

指導者：甘棟師（イエズス会中国人指導区）

費用：自由寄付

申し込み：8月6日までに、Fax または お電話、あるいは郵便、E-mail

地震と津波の犠牲者を哀悼し、生活の建て直しの苦勞を続けていらっしゃる最中の東北地方の方々のことを思いながら、聖霊降臨祭を迎えています。聖霊降臨のミサに歌う「聖霊の続唱」の中の数節をもって、心を合わせたいと思います。

聖霊来てください。優しい心の友、さわやかな慰み... 苦しむときの励まし... 憂いのときの慰め... 汚れたものを清め、すさみを潤し、受けた痛手を癒す方... より頼む者に尊い力を授ける方。

中国センターでは毎週の中国語ミサの後、震災に際しての祈りと数回にわたる募金を致しました。岩橋淳一神父様のけがによる長期入院が続いている最中の震災と、原発事故による放射能汚染の不安の中で、多くの信者、特に小さい子どもを抱えている家族が避難して一時帰国しましたが、現在、ほとんど戻ってきています。従来通り上野教会の日本人信者と共に、聖霊降臨祭の合同ミサと、交わりの席を楽しみに準備しています。

この春、不幸中のさいわいの一つとして、4月から東京の吉祥寺教会に就任した中国人パウロ神父様（神言修道会、昨年叙階）が、毎月一回ほど上野教会に来て、日曜日の中国語ミサを司式し、説教して下さることになりました。パウロ神父を派遣して下さっている吉祥寺教会の皆様と神言修道会に感謝します。

また、草の根で中国教会を親しく知り、支えようと活動しているザビエル会（会長・若林支郎さん＝聖イグナチオ教会信徒）は、教皇ベネディクト16世の呼び掛けに答えて5月28日、中国教会を知り、祈るプログラムを主催しました。その際、松隈康史氏（カトリック新聞）の講演の後、今号の「友誼の聲」に執筆して下さっている中国人のリ・アンドリュウさんが、自分の生い立ちについて分かち合ってくださいました。ご自分の両親の揺るがない信仰について話された時、涙をおさえ切れませんでした。

ディーターズ神父

# 神様を求めての歩み

## 《個人の信仰の分かち合い》

私は中国の北方地方で、代々のカトリック家庭に生まれました。両親は敬虔な信徒と言えますし、親戚もすべて信者です。ですから選択の苦しみなどもなく、私も当たり前にかトリック信徒でした。私が生まれた時代、中国では声高に「改革開放」のスローガンが叫ばれ、宗教信仰もまた比較的自由になりました。それゆえ小さいころの記憶では、毎日両親について家庭集会に行き、祈っていました（なぜ家庭集会に行き、教会に行かないのかと不思議に思われるでしょう。文化大革命のころ、多くの教会が壊されたからです。幼い時、古いのは壊され、新しい教会はほとんどなかったからです）。毎日、朝晩の祈りは主にロザリオで、時には聖書も読みました。20数年前は司祭も少なく、私たちの教区全体では司祭はたった3人でしたが、10数万人の信徒はあちこちに散らばっていたのです。それで大きな祝祭日には、一日早く一家で30キロ以上離れた所のミサにあずかりました。司祭不足でしたから年1回ミサにあずかれるだけでもありがたかったです。でもこの困難さは、私の幼い時の信仰に影響しませんでした。両親が敬虔だったからです。自然と教会に行く習慣も身につきました。中学に上がる前は、なぜカトリックの信仰を持つのかなど考えたこともありませんでした。

でも中学以降は、同級生の多くが信仰を持たなかったの、自分は変わり者ではないかと、ふと思うようになりました。例えば生物の授業で先生が、ヒトはサルから変わってきた（ダーウィンの進化論）と話しました。その時、私だけがばかみたいに手を挙げ、「違います。人は神様が作ったのです。サルが変わったわけではありません」と言ったのです。こんなことが数回あったので、同級生たちは私を笑いものにし、変わり者だとばかにするようになりました。これが原因で、私は帰宅すると両親に言ったのです。「なぜカトリックを信じるのですか？信じて何もいいことがないのに」。両親はカトリックの教えについて多くを知りませんでしたから、私の問い掛けに答えられませんでした。ただ、信仰は善いことだからと励ますだけでした。思春期の反抗だったのか、それとも同年代の子たちの圧力だったのか、私はある時期、教会に行かなくなりました。信仰は人を騙すもので、あがめているだけだと思っていたのです。このような信仰への反抗は、中学、高校の日々、私について回りました。

しかし高校3年生の時、父が肺がんになりました。わが家にとっては間違いなく大打撃でしたが、私の信仰にとっては転換点になったのです。父の闘病は1年に及びました。寝たきりになったのです。私は長男ですから見舞いや話し相手を務める責任がありました。闘病の間、父が最も望んだのは、私が新約聖書を読み聞かせることでした。その時は単に親孝行のつもりで毎晩新約を読みました。初めは聖書を読んでいる感覚でしたが、何度も読むうちに、反対に聖書が私を読んでいるような気になり、引きつけられる力の強さを感じるようになりました。そして読む時にはいつも大きな希望、生氣と活力を感じました。父に読み聞かせる時、家族みんなもいっしょに聞きました。読み終えるといつも、家族が解け合っているような感じがしました。父の病気は日々悪化しました。がんですから痛みが襲います。痛む時には額に汗が出ていました。そんな時、母はいつも父に「痛むでしょう。痛み止めを飲みますか」と聞きました。でも父は十字架を手にして、「私の痛みなど、イエス様の痛みと比べると何でもない。イエス様のおかげで、こんな痛みなど何でもない」と答えるのです。あの時の父を思い出すと、剛毅さと信仰の強さを思います。父は1年後、イエス様への信頼を胸に、あの世に旅立ちました。

このような経験によって、私は1つの問題を問い続けるこ

とになりました。「信仰とは何だろう？なぜこんなに大きな力があり、人に生死を越えさせ、悔いのない生と落ち着いた死を迎えさせ得るのだろうか？」。私は司祭にこのような問題を尋ね、生死に関するたくさんの本を読みましたが、答えは得られませんでした。父が亡くなった後、私はこのように迷う生活を1年送りました。こうした問題に1年間取り付かれたのです。飢え渴いたように生死と信仰の問題について問い続けました。そのころ多くの親戚や友人は、私がおかしくなるかもしれないと感じました。内面の不安や、信仰とは何かを知ろうと渴望しているのを理解する人はいなかったのです。

一年余り経った後、私の中に声があるのを、ふと感じました。「一生かかっても信仰とは何かは分からないだろう。しかし信仰とは、人々が生死の課題に向き合った時の助けとなり、人の生前と死後に真実の交代があることを見ることができたのではないか」。この声は真実を突き、疑う余地のまったくないものでした。答えを見出したと感じ、自分の信仰には価値があると思いました。同時に、このような信仰を人々に宣べ伝える責任があるとも感じたのです。今この経験を振り返ると、神様は私を乾いた砂漠を渡らせ、神様のぶどう園に導かれたのだと確信します。

父が亡くなって2年後、母に神学校に入り、神父になりたいと話しました。そのころ家庭はとても厳しい状態でしたが、母は「自分の使命が神様の福音を宣べ伝えることだと感じるのなら、行きなさい。私は信仰の道理についてはよく知らないけれど、でも毎晩、おまえのためにロザリオの祈りをしましょう。イエス様とマリア様がきつとおまえを守ってください」。家を離れる前の晩に、「明日、遠い神学校に行くけど、お母さんと2人の弟が心配です」と母に話したことを覚えています。でも母は信念をもって答えました。「神様が人を世に送り出されたのだから、必ず養ってくださいるはずです。おまえは神様がお望みになっていることをすればいいのです」。

こうして私は教区の神学校に入りました。まだ20歳にもなっていませんでした。

## 《来日後の私の感想》

一人の中国人、そして天の国のために地を拓こうとしている私が、なぜ日本で養成を受けることになったのでしょうか？来日後にはどんな感動があったのでしょうか？このような養成は、私が神様をうやまい、人々に奉仕することにとって、どんな助けになるのでしょうか？中国と日本は隣国ですが、両国のカトリック教会には双方向の関係がありません。私も長上とこの話題になった後、私は次のように話しました。「今日の教会は本当に互いに学ぶことが必要です。中国の隣国として、私たちは日本に対してある程度、理解を持つべきです。もし必要だとお感じなら、私は日本に行って養成を受けます」。このひと言が、私を再び異国での生活に導いたのです。誤解しないでください。私は自分の選択が正しかったと感じています。しかし、家族に日本へ行くと言った時、家族の最初の反応は「なぜ日本なのか」。日本がかって私たち多くの中国人を殺した歴史をまさか忘れたのか？。これは83歳になる祖母の言葉でした。その時、私は何と答えたらよいか、本当に分かりませんでした。

日本でほぼ1年になります。自分の生活や現代の日本、そして日本の教会のことなどをいつも家族に伝えています。家族もだんだんと私の選択が正しかったと感じるようになりました。もし私に日本をどう見ているかとお尋ねなら、2つの点をお話できると思います。第1は日本の文化全体につい

て。第2は日本の教会についてです。日本人は深い文化的細かさの影響で、独特の一面を持っています。例えば、ほとんどの日本人は特定の信仰を持っていません。しかしこれは、日本人の霊性と「至上」（私たちカトリックが神と称しています）を求めようとする姿勢に影響しているわけではありません。私はお正月、お寺と神社に行く機会に恵まれました。たくさん日本人が敬虔に祈っている姿を見ましたが、誰に祈っているのか、自分でもよく分かっていないようでした。日本人は自分たちの聖道と外来の仏教を融合しており、さらに中国の儒家と道教の思想も持っています。ですが、このような文化の中にあっても、信仰によって誠実、忠誠、素朴な日本人があるのです。

日本の教会は、中国の教会と似ているところがたくさんあると感じます。例えば教会で見かけるのはほとんど老人と女性です。これらの人こそが真剣に自分の魂の問題に向き合う必要があるようです。私は時々、日本の教会でミサにあずかりますが、1つのことを問わざるを得ません。「私たちは年を取って初めて、神の存在を意識することができるようになるのでしょうか？」。また日本の教会の良い面は、系統的であり、よく組織されていて、多くの活動があることだと言えます。多くの人が自発的に信徒団体をつくり、自分たちの霊性を強めると同時に、社会の谷間に置かれた別の人たちを助けています。いくつかの団体は国境を越えてよい業を行い、福音を広める上で懸け橋の働きをしています。例えば東京の聖イグナチオ教会には「ザビエル会」があり、中国の教会と多くの関わりを持っています。

東京は大都市です。異なる国から来た様々な人たちがいます。中国カトリック信徒らによって構成される「中国センター」には私自身も参加しています。この共同体と日本のカトリック教会は好対照です。信徒たちはすべて若い人だからです。私はこの共同体に溶け込み、運営方法、将来性などを理解し、学ぼうと試みています。私自身は、「中国センター」が単なる国外の一信徒組織であってはならず、宣教司牧の人材を育成する所であるべきだと考えます。自由な環境の下で信仰の根を深く張り、いつか必ず光と塩の働きを果たすことができる日が来ることに備えるのです。これはディーターズ神父様と井上神父様の願いでもあると信じます。

私がこの2つの面を見る時、多少なりとも私自身の未来の進むべき方向をも見ているのです。時期尚早ではありますが、しかし私がしたいと望むことでもあるのです。私が日本に来て養成を受けることができるのは、単なる1つの偶然などでは絶対になく、どう考えてもすべて神様のご計画なのです。これは、長上がなぜ私に社会学を学ぶのを望んだかでもあり、私が中日の文化をつなぎ、その中からカトリックの信仰を見るように望んだかでもあります。自信をもってこう言うことを許していただきたい。「神様は以前から私たち中国人、日本人、そればかりか、すべてのアジア人を選んだ」のです。イエス誕生の500年ほど前、神様は私たち中国に孔聖人（孔子）を与えてくださり、彼の思想をアジアで大きな影響を持つものとなさいました。今日に生きる私たちは、もし私たちの血の中に生きる、あの神様の恵みを、信仰の中で統合することができるならば、神様が私たちに孔聖人を与えてくださった大きな恵みは無駄にはならないのです。もし神様がお許しなら、私は文化と信仰の統合に力を尽くしたいと思っています、そして中日の教会が先導役を果たすことができることを望んでいます。

Andrew Li